

特集

「泊まってこそ、

わかる福井」

「宿泊業の新しい仕掛け」



県内宿泊者数と観光消費

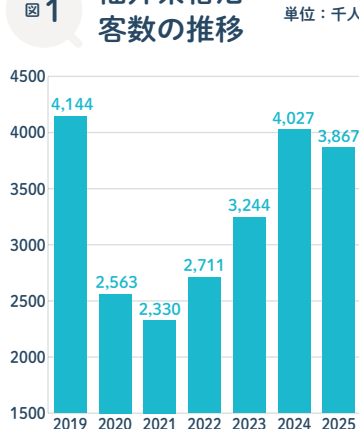
観光庁の「宿泊旅行統計調査」によれば2025年の県内宿泊者数（速報値）は前年比4.0%減の延べ386万7,680人と北陸新幹線の開業初年度と比べると一旦落ち着いたものの、2023年比では依然19.2%増と底上げしている（図1）。なお、外国人宿泊者数は過去最多の延べ11万2400人（前年比19.6%増）と初めて10万人を超えた。

また、県内の観光消費については2024年のデータでは宿泊客の消費単価は2万4,913円と過去最高となっている。図2のとおり、日帰り客と宿泊客では土産品などの消費額も大きな差があり、観光庁の旅行・観光消費動向調査でも宿泊旅行の1人あたり消費額は日帰りの約3.6倍にのぼる。来訪者を「泊まる旅行者」に転換することが、観光消費拡大へ向けた最も有効な手段であると裏付けられている。

2024年3月の北陸新幹線開業を機に、福井市内の宿泊施設数は増加傾向にある。今年2月には和風プレミアムホテル「御宿 野乃福井」がオープン。福井駅西口再開発ではさらにホテル建設も予定されており、今後も民間投資が続く見通しとなっている。

訪れる人が確実に増えてきている中で、福井へ「来てもらう」だけでなく、いかに「宿泊」「滞在」へと発展できるかが今後のカギとなる。受け入れ側の宿泊業の実状はどのように変化しているのか。北陸新幹線開業後にオープンした個性ある宿泊施設や業界団体への取材を通じて、宿泊の最新事情を探った。

図1 福井県宿泊客数の推移



引用：観光庁 宿泊旅行統計調査

図2 日帰り・宿泊客別の観光消費額

単位：円

区分	日程	全体額	宿泊費	土産品代	その他入場料等
県内客	日帰り	2,729 (-527)	—	1,054 (18)	1,675 (-545)
	宿泊	17,963 (5,226)	11,480 (4,167)	2,219 (714)	4,264 (345)
県外客	日帰り	6,032 (-247)	—	2,414 (490)	3,618 (-737)
	宿泊	26,537 (2,895)	13,397 (461)	4,282 (834)	8,858 (1,600)
合計	日帰り	3,972 (-417)	—	1,566 (197)	2,406 (-614)
	宿泊	24,913 (3,326)	13,034 (1,158)	3,891 (809)	7,988 (1,359)

※カッコ内の数値は前年比
 ※「その他入場料等」には昼食代・域内交通費を含む
 出典：福井県交流文化部観光政策課「令和6年 福井県観光客入込数（推計）」

アート×リトリートで 福井の魅力を繋ぐ滞在拠点

足羽川リトアート asunowa
(株式会社 umitoma)

代表取締役 高木 秀樹 氏



HP

今年2月、福井市つくもの足羽川沿いに、新たな宿泊拠点「足羽川リトアート asunowa」がオープンした。民間企業の社員寮をリノベーションしたこの施設は、全7室にキッチンを完備。最上階にはクイーンベッド4台と貸切プライベートサウナを備え、家族や複数グループでの長期滞在にも対応する。特筆すべきは、福井出身の芸術家・長坂真護氏の作品が息づく空間設計だ。ガーナのストラム街に棄てられた電子ゴミをアートへと昇華させた作品であるアート体験と非日常的な休息（リトリート）

アートと癒やしが生む新空間



を組み合わせ同施設独自のコンセプト「リトアート」が生まれた。作品に囲まれた空間で過ごす時間そのものを「体験価値」として提供する。

地域を繋ぐ「ハブ」の役割

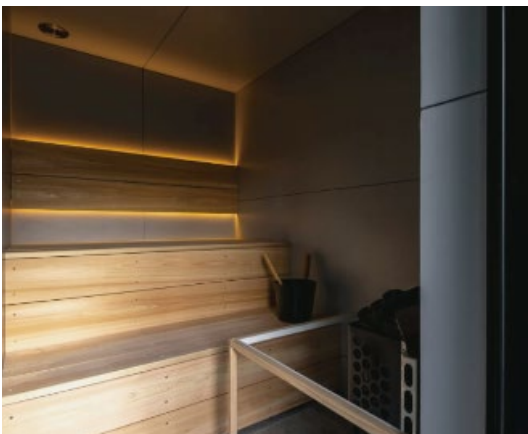
(株)umitomaの高木秀樹社長は、宿を拠点に街を深く知る「滞在型スタイル」を追求する。敢えて館内に飲食機能を持たず、徒歩圏内の片町や浜町といった飲食店街へ足を運んでもらうことで、地域経済の循環を生む「ハブ」としての役割を重視する。運用面では、無人チェックインやAI自動応答といったDXを積極的に導入。ルーティンの仕事をシステムに委ねることで、スタッフが対応に追われる時間を大幅に削減。「人ならではの温かな接客」や地域案内に専念できる環境を構



長坂真護氏のアートが光るスイートルーム

築した。

さらなる視線は、海外や近隣県との広域連携にも向けられている。小松空港の台湾・韓国便の活況を追い風に、金沢から車で1時間という好立地を活かしたインバウンド誘致を加速。石川県事業者との連携も視野に入れ、「競合ではなく共創」の精神で北陸全体の観光を盛り上げたいと話す。その背景には、高木氏が独自に参加した「福井県観光アカデミー」での学びがある。飲食店や体験コンテンツなど、地域に点在する魅力を繋ぐ必要性を痛感した同氏は、今も自ら情報を収集し、観光客への発信を絶やさない。「福井の日常は外の人には大きな価値になる」。その信念をもとに、福井の魅力を繋ぐ存在となる。



最上階はプライベートサウナを完備

既存の強み+αで
鷹巣の価値を磨く

国民宿舎 鷹巣荘
支配人 毛利 昌喜 氏



HP

VILLA TAKASU
海のHANAREをオープン

福井市鷹巣地区の活性化を目指す「国民宿舎鷹巣荘」は、「本館」^{ヴィラ}「VILLA」^{ハナレ}「HANARE」と3つの異なる宿泊形態を擁し、多様な年代の旅行者を受け入れる。1969年に開業した本館は12年前にリニューアル。近隣でも珍しい「源泉かけ流し」の温泉を目当てにしたリピーター層が宿泊客の中心だ。一方、北陸新幹線開業を見据え敷地内に一昨年オープンし、グランピングが楽しめる1棟貸切の「VILLA」^{タカスウ}「TAKASU」(2棟)とコテージ「海

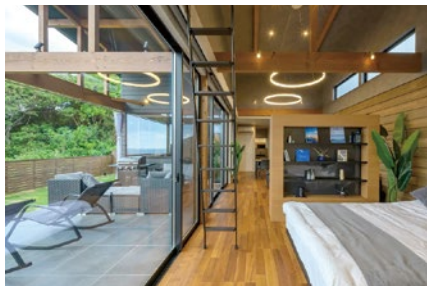
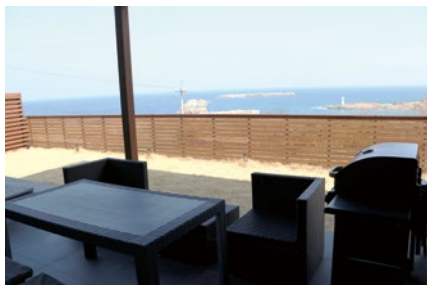
の「HANARE」(3棟)は、プライベートな空間を求める50代以下の家族連れや若いカップル、グループ客をターゲットとする。関東圏からの来客増加は全館共通の追い風となり、ヴィラは8割以上が県外客を占める。「静かにのんびり過ごしたい」というニーズを持つ客層が多く、鷹巣に住む地元スタッフによるアットホームな接客が好評だ。

地域が連携して人の流れを生み出す

特色ある取り組みとして、ヴィラを活用して近隣の認定こども園「鷹巣ひかり」と連携した「保育園留学」の受け入れがある。これは海外の家族が1〜2週間ヴィラに宿泊しながら子どもを地元園に通わせて交流するという株式会社ハイク社のプログラム。園内での園児とともに生活できるので、両親は安心してレンタカーなどで観光や買い

物で周遊し、福井を満喫できる。園長の鳴海理了氏(なるみまのり)によれば、昨年はアメリカなど3か国から6家族の受入があり、4月以降も多数の受入を予定している。鳴海園長は「良い宿泊環境で生活ができ、地域おこしだけでなく、国際・異文化交流にも寄与できる試みなので今後も継続していきたい」と語る。

今後の課題は認知度の向上と物価高騰に伴う料金改定。「まずは知ってもらうことが第一歩。実際に来ていただければ、温泉・景色・料理で満足していただける自信がある」と毛利氏は語る。値上げ分の満足度向上を今期の課題と捉え、派手なサービスではなく、美味しい料理と源泉かけ流しの温泉という本来の価値を磨き上げていく。繁忙期を前に、「鷹巣」という地をどう発信するか、スタッフ一人ひとりが自律的に考え、その魅力を精一杯伝えていきたい」と毛利氏は意気込んだ。



ヴィラの様子



保育園留学の様子

専門家に聞く



「また来たい」と思ってもらえる福井を目指して

北陸新幹線開業から3年目を迎える中、福井市内の宿泊事情や利用ニーズはどう変化しているか。福井市旅館業協同組合の役員の方々に話をうかがった。



HP

ホテル建設に伴い客室数は増加

福井市内の宿泊施設の客室数は約3,100室、最大5,000名程を収容する。県全体では約1万人規模の収容力を持ち、その半数が福井市内に集中している。福井駅周辺の再開発により、駅前南通りにはカンデオホテルズをはじめとする大手ホテルの建設計画が着々と進んでおり、2028年頃までに400室以上が加わる見込みだ。平日の稼働を考えた際に、大量な客室数が本当に必要なのかという議論はあるが、大手ホテルの参入は「福井」の名を全国の予約サイトや広告で露出されるため、これまで福井を選択肢に入れなかった層へのアピール効果は大きい。全国規模の組織力・集客力により、「呼び水」として新規顧客を福井へ引き込む効果が期待される半面、価格競争を過熱させる懸念もあり、地域の宿泊業全体が共倒れしないよう、安売りにくい適正価格の維持が必要だ。一方、金沢では既にホテルの増棟で価格競争が起きており、日によっては福井より安く泊まれるケースも見られ、福井でのイベント開催にもかかわらず新幹線で30分圏の金沢に宿泊し移動する旅行者も少なくない。

他にも、旅慣れた外国人観光客においては、長野県内のスキー場を備えた

温泉地中で・長期間滞在する拠点として、北陸新幹線で金沢や福井まで足を延ばして恐竜博物館・永平寺・東尋坊を周遊するスタイルも増えている。

福井をいかに「滞在の拠点」にするか

金沢のように観光がコンパクトに完結するエリアとは異なり、福井は観光地が点在し移動が前提となる。関東圏からの旅行者はレンタカーで広域移動する傾向が強いため、連泊してもらえぬ「拠点づくり」と「魅力発信」が不可欠だ。

業界の課題は「平日稼働の底上げ」と「施設・設備のリニューアル」である。観光だけでなくビジネス客の取り込み強化や、行政補助を活用した省力化システムの導入、ハード面の高付加価値化などにより、「選ばれる特色」の創出が鍵を握る。また、福井ならではの城下町の歴史を活かしたまち歩きコースの紹介や、埋もれている地域資源の観光コンテンツ化も推進していきたい。

福井は「噛めば噛むほど味が出る」まちだ。一度では回りきれない奥深さを伝え、「また来たい」と思わせる体験を磨きあげること、顧客の奪い合いでではなく、新たな客層を福井全体へ呼び込んでいける好循環を作り、福井全体の観光を盛り上げていきたい。

普段の当たり前が

誘客価値となる

北陸新幹線の開業を契機に、福井の宿泊業は大きな転換期を迎える。増加する来訪者をいかに「滞在型」へと誘導するか、それが事業者共通の課題といえる。取材を通じて見えてきたのは、施設の整備をしっかりと行った上で、食・自然・文化・歴史など、福井の人々の何気ないモノ・コトが県外・海外の旅行者には唯一無二の価値として響くという点だ。その気づきをもとに、宿泊施設は地域の資源や体験コンテンツ、近隣施設を繋ぐハブ的役割を担い始めている。宿泊者が増えることで、その周辺の飲食・小売・体験業が潤い、地域に人が回りはじめると、好循環の可能性が期待できる。個々の施設が点として競い合うのではなく、地域が手を取り合い「面で魅せていく」ことが求められる。福井全体の認知度を高めていく発想こそが、各事業者に通ずる姿勢として浮かび上がった。まずは各々の「当たり前」を価値として再発見し、手を携えて発信することが、これからの福井の観光を動かす第一歩となるはずだ。